

令和元年度 第1回滋賀県公立大学法人評価委員会開催結果（概要）

日 時 令和元年7月3日（水）
13時55分～16時10分
場 所 滋賀県立大学 教授会室

【出席委員】 北野委員（委員長）、長上委員、磯田委員、清水委員、前野委員

【事務局】 前田私学・県立大学振興課長、他関係職員

【県立大学】 廣川理事長（学長）、青木副理事長、高橋理事、
久保田事務局次長、他関係職員

1. 開会

- 前田私学・県立大学振興課長あいさつ
- 委員、大学および事務局の出席者紹介
- 委員会の進め方について
 - ・委員会の進め方について、事務局から説明

2. 学内調査（視察）

- 授業見学
- 圃場実験施設の視察

3. 質疑応答

（委員長）残りの時間、質疑、意見交換ということです。学内をご覧になって感想や質問などがありましたら遠慮なくおっしゃっていただきたいと思います。また、学長からありました大学の概要の内容についても、質問などがありましたらよろしく願いいたします。いかがでしょうか。

（委員）留学生について、どこの大学でも悩んでいることですが、留学生が少ないということ、また、修士、博士と上に上がるほど占める率は高くなり、博士になるとかなりが留学生で占められています。下から上がってこないで、それを埋める形で留学生が入ってきているという感じを各大学が持っています。それはそれで悪いことではないのですが、せっかく大学の4年間教育したのに、よそに行ってしまう、よそから入ってきて再教育して、また出て行ってしまい、ドクターは全く別の人が入ってきています。せっかく、教育改善の努力をしているにも関わらず、研究に近いところに生きてこないということがありますが、その辺りの対応や方策をお持ちでしたらお聞きしたいです。

（大学）非常に難しい課題です。工学部ですと、博士前期課程までは結構進んでくれますが、その

一つ上、博士後期課程には入ってくれません。反対に、人数は少ないですが、人文の方は下から上がって博士後期課程まで行く学生が少しはいます。学部によってだいぶ違うというのが実感です。それに対してどう対処したらいいのかということについては、工学部を増やすために社会人入学をしていますですがなかなか増えません。大学院博士後期課程まで行って研究者として一人前、ということをして社会に理解される、研究の方法は知っているのだから研究テーマさえはっきりすれば力を発揮する教育をして、それを社会が認めるということをしていかなないと苦しいと思っています。その辺りを大学として改善し、学生自身にそういう道を積極的に示さないといけません。奨学金の問題も勿論あります。

(委員) 今は景気がいいので、どうしても就職に引っ張られる状況にあり、大学院に行こうかなと思っていた学生も、周りにつられて、あるいは企業から引っ張られて就職してしまう傾向にある気がします。経団連の就職協定の見直しもどちらかというと企業の論理で、頭数をそろえたい、という、あまり大学院という、教育の高度化ということを念頭に置かないで、ボリュームゾーンに対する話ばかりをし、枕詞に society5.0 ということは載っていますが、それとは全然違う就職のやり方を考えておられるところがあります。我々としては社会に向けて在学することも大事だし、一つ上のランクに行くことで社会に出て活躍できるいろんなネタが獲得できるということを学生に向けてうまく説明していかないといけないと理解しています。

(大学) 今の話につけ加えると、私自身が、ドクターまでずっと行き、ドクターに行くときに企業から奨学金をもらい、3年経ったら就職するというコースを選んできたことから、そういうようにもっと企業の方も理解があると違ってくるのかなと思います。大学で学ぶことを企業が必要とするマッチングをしっかりとやっていければ、学生自身もそこで何を学ばないといけないのか、ということも見えてくるのではないのでしょうか。もう少ししっかり連携ができればと思います。

(委員) 先ほどの留学生の問題について、入学者の傾向を見ると、滋賀県内は前年度より3ポイント上昇していますが、例年3割ぐらいになっています。今後、どこの大学もそうですが、少子化ということで、なかなか今までのように日本人ばかりを呼び込むのではなくて、その中で各大学が留学施策をもっていると思います。何年度には留学生を何人にする、出す方を何人にするという具体的な目標値を定めてそれに従って奨学金制度をどうするかといった施策を立てていますが、県立大学ではどのような施策を考えていますか。

(大学) 私費外国人留学生を入学させるということについては、特別な施策に取り組んではいません。以前はそれなりの人数がいたのですが、国の留学生30万人計画があり、私立と国立に対しては、留学生に対して奨学金を与える制度がありましたが、公立大学は除外されています。ですので、同じように受験はしてくれませんが、奨学金のあるところに全部流れていってしまいます。それが始まってから減っていつているので、奨学金をいかにそういう学生に渡すかというのを保証しない限り戻ってこないだろうと考えるので、そこに手厚くするのか、日本人学生に手厚くするのか、原資の問題もありますので、そこに手厚くするのは難しいと考え

ています。留学生がくることで、ここにいる日本人学生も国際感覚が磨かれると考えるので、いかに交換留学を増やすか、あるいは近くにあるJCMU（ミシガン州立大学連合日本センター）の学生と交流するなど、できるだけ留学生を増やすことを考えています。今、一番の問題は、宿舎が満杯で、県から借りていたところも老朽化で使えなくなっています。留学生会館と宿舎をつないだ学生が交流するところをつくり、留学生を受け入れ、交流を進めるということを考えています。これは第3期の一つの大きな課題です。

（委員）交換留学生が非常に増えているので、その意義もよく分かりました。国の方針についても伺いたいのですが、そうすると、公立大学における留学生の支援は、基本的には自治体がやるということでしょうか。そうすると、滋賀県がどうかということになります。

（大学）そこがよく分からないのですが、国の政策はなにも聞いておらず、聞いてもなかなか言われないので、最終的に滋賀県とどうするか、ということになろうかと思えます。

（委員）国の方は、最初の掛け声は盛んですが、財政的なことをまったく考えてなくて、従来のお金の中でなんとかしなさいということ言うし、理念的なことは言うけれど実際のお金はこないということが日常なので、逆にそれぞれの大学で頑張る、あるいは、民間から奨学金なり寄附をしてもらって自助努力をするしか、今の状況ではどうにもならないかなと感じています。ただし、国際的に見て日本の授業料は安く、特に国立並みということであれば、逆にそこにメリットが出てきており、うまく宣伝すると、いったん離れていた留学生を呼び戻すことも不可能ではないと、私は感じています。中国人しか残っていませんが、いろんな国の人々が日本で勉強したいと思っており、10年前とはずいぶん環境が変わっていると思いますので、アピールをしていく必要があるかなと感じています。

（大学）是非、その辺りも考えていきたいと思えます。THEや大学ランキングも、国内の学生だけではなくて海外の学生も見て大学を選ぶ尺度になっていると聞きますので、そこにも力を入れ、上げることに力を入れるのではなくて、結果的に上がることも意識しながら進めていきたいと思えます。

（委員）車いすに乗る側の立場を体験することを授業の一環としてやっていました。モノづくりのビジネスマッチングをやっていたので、学生のアイデアコンテストをやっていますが、それとは別に、食をテーマにした商談会で生産者とバイヤーとのマッチング、販路の拡大ということをやっています。食の商談会では、生産者とバイヤーとの販路拡大だけではなく、生産者の方が、共同開発や土壌、肥料のことなどいろんな課題を抱えておられ、生産する環境のことで連携できたこともあります。そうしたことで生産者や企業に学生も一緒に関わっていただくと、地元の企業を知っていただくことになり、ひいては県内就職につながっていくと思われるので、そうしたサポートをさせていただければと思っています。県立大学とも連携していますが、滋賀医科大学や滋賀大学のデータサイエンス学部とも連携しています。データサイエンス学部と企業との連携や、滋賀医科大学と企業とのコラボでは医療技術だけではなく、病院食でなにかうまく企業とコラボできないか、など、大学側のニーズ、シーズは

あり、実際に数十社と面談するということをしていますので、県立大学ともなにかできればと思います。企業との共同開発や共同研究をすると、設備についても企業側から資金を得られるので、企業との連携ができる形をなんとか作れないかと思っています。

(大学) 非常に力強いお話をありがとうございます。我々も研究でいかに連携できるかということで、コーディネーターを入れて学内の研究をいかにつなぐかということをしてしており、それに学生も巻き込めれば良いと考えています。

(大学) 学生が地域に入って、地域課題を地域の方と共有して取り組んでいく取組を近江楽座と呼んでいますが、まさにこれが本学の特徴と思っています。年間、延べ人数で400人程度の学生が、県内各地や震災被災地、一部は海外に行き、地域の課題に向き合い、地域の方とコミュニケーションをとり、課題を聞き、解決策を提案し、できることを実現していくという取組をしています。例えば、豊郷で古民家を改修して使えるようにするという取組を10数件しています。また、耕作放棄地で無農薬野菜を作るなど、22の取組をし、それに対して本学も金銭面も含めて全面的にサポートするという取組をしています。地域、企業の課題を解決するため、昨年、地域連携の窓口を地域共生センターに設け、コーディネーターを2人置いて、地域から、審議会の委員やSDGsの講師派遣、困っている課題に対するアドバイス、一緒に研究してもらいたいといった相談を受け、本学の教員につなぐという取組をしています。まだ宣伝が十分できていませんが、地域に貢献していきたいと考えており、せっかくシーズがあるので、是非お話を持ってきていただきたいし、我々もPRしていきたいです。

(委員) 昨年度、「あかりんちゅ」など3件ほど近江楽座を紹介していただきました。アントレプレナーの育成などもされているので、インキュベーションセンター、インキュベーションラボをやっていききたいと考えており、起業したい方もサポートしていききたいです。学生が起業するという事もあると思います。

(大学) 今、1件、学生が起業したいというのが出てきており、学内規程を整備しているところです。開学以来、学部学科を設けてきていますが、全体で見ますと、農学部的なところで物を作っていますが、生活栄養があり栄養士を育成しており、料理につながります。違う目で見るといろんなところが関係しており、連携して地域に貢献できるということがありますので、今、教教分離をやって、その後、学部学科を再編していくかということは、今言うべきことか分かりませんが、次の視野としてはそういうことを考えていかなければならないと考えています。

(委員) 学部学科を飛び越えると、また新しいものができるのではないかと考えています。

(大学) 是非、新しいことを実現したいと思います。よろしくお願いします。

(委員) 関連しますが、企業の中に学生を短期ではなく半期ぐらい入れ、企業の若手社員と一緒に、企業の問題点を洗い出して、解決の施策を考えるというPBLをしています。そうすると、

企業にも、今まで自分たちにはなかった視点で見てくれる、とか、将来を任せたい幹部候補の社員にいい刺激になったなどと喜んでもらえ、一緒にやりたいという企業も増えてきています。近江楽座もすごくいいと思いながら聞いていましたが、もう少し具体的に、企業の課題解決をPBLの形で企業の若手従業員と一緒に企画していくと、そこに参加した学生が地元企業も意外と面白いことができる、と思ってそのまま残ってくれるということにもつながっていますので、近江楽座を企業との共同研究という形にすることもよいと思いました。また、高校に出前授業に行き高校生も一緒になって課題解決に取り組むと、キャリアプランにつながり、有名大学だけが面白いことをやっているのではないことに気付いたり、大学を通り越した後のキャリアを考えて大学を選ぶということの芽が出てきます。自分たちの研究を高校に出前授業に行くことも、前期課程ぐらいであればできると思うので、近江楽座みたいな中で広げることもできるのではないかと思います。

(大学) 今、高校生のインターンシップは、専門高校は多いですが、普通高校は少ないです。県の教育委員会も広めていこうとしており、高校の段階から経験するという事は非常に強いです。我々からすると、県大が行くことで県大に行こうかな、と言ってもらえれば非常にありがたいですし、もう一つ先、地元に残ってなにか解決しようと思ってもらえるといいので、今のアイデアを参考に、県教育委員会とも協力しながら取り組んでいきたいと思います。

(委員) 私も、インターンシップのコーディネイト委員を務めていますが、日本の高校のインターンシップは中途半端で、1年ぐらい行かせようと主張しています。大学生も企業が給料を払い1年ぐらい企業体験をする機会が増えるといいと思っています。最近、製造業では人手不足と言われており、ベトナムから実習生を受け入れています、それをコントロールするのにベトナムのエンジニアを現地で採用している、という話をよく聞くようになってきました。エンジニアは、日本語を話せるし優秀です。ベトナムやカンボジア、ミャンマーなどで裕福な家庭の子は、奨学金がなくても来れる学生はいます。そんなところと交換留学できるいいと思います。

(委員) 県立大学は、環境などをやっておられて、考え方がSDGsとオーバーラップすると思います。もう少しSDGsをキーワード的に前に出してもいいのではないのでしょうか。いろんなことがこの周辺では定着しているかもしれませんが、国際的に打って出るのに役に立つのではないのでしょうか。本学でも少し取り組んでおり、そうすると企業の方と話すときに案外話がしやすく、SDGsのキーワードからどれかという、スッと入っていけます。企業も社会貢献することが大事になってきて、ある程度議論が積み上がったところから話せるので、楽になるという印象を持っています。ブランディングの話もしているので、流行しているうちにのっていいのではないのでしょうか。

(大学) SDGsについては、朝日新聞のSDGsアワードに応募して賞をいただいているので、それなりにやっていることは認めていただいています、もっと頑張らないといけません。SDGsがあるから、ではなく、本学の建学の精神とオーバーラップするからということだと思います。

(委員) 先取りしてやっていたということで、留学生の確保などに活かせる気がします。今まで県立大学がやっていることを一から説明するのではなくて、SDGsに取り組んでいますと言えばある程度入ってくるという使い方はありかと思います。

(大学) 先ほどのことで、ベトナムやカンボジア、ミャンマーで交換留学の相手校を見つけるのに、ある公立大学はベトナムの高校と連携し、そのいい学生を推薦してもらい留学生を得るということをやりだしており、そういうやり方も一つかと思います。

(委員) 私立の高校でもやっているところはあり、そのまま日本で就職し人手不足を埋めるということがあります。

(委員) ベトナムなどの親は子供にお金をかけることを厭わず、日本人以上と思います。是非トライしていただきたいと思います。

(委員) 障害がある学生への支援について、日常生活支援や教学上の支援はどここの大学でも悩みながらやっており、支援室をつくりコーディネーターを置いて、ということをやっているところが増えてきていますが、その辺りはどのような組織になっていますか。

(大学) 体制を組み、学生一人一人にケアしています。

(大学) 障がい学生支援室というところがあり、コーディネーターを置き、外部の専門家にも来ていただき、定期的に会議を開くなどしています。障害を持つ学生も増えているため、その体制についてはだいたい整えつつあります。いろいろな制度も作っており、ES制度、エデュケーション・サポーターとして学生にいただいたりという対応をしており、個別に障害学生に応じて対応しています。

(委員) 組織図の中に支援室というのがなかったので、どこに位置付けられているのかな、と思いました。

(大学) 学生・就職支援課を中心に、横の連携もしています。学生・就職支援課が担当し、施設担当としての財務課や教務課の担当が属しているという形です。

(委員長) 活発に御議論いただきありがとうございます。時間がきてしまいました。次回以降も議論を続けてまいりたいと思いますのでよろしくお願いします。それでは、進行を事務局にお返ししたいと思います。

4. 閉会